

昭和63年度

登校拒否児との面接過程に関する研究

～教師のかかわりのあり方についての考察～

川崎市総合教育センター教育相談Ⅱ研究会議

登校拒否児との面接過程に関する研究

～教師のかかわりのあり方についての一考察～

教育相談Ⅱ研究会議

黒澤 通哉¹ 木村 巖²

要 約

学校に行こうと努力しているにもかかわらず、なんらかの心理的理由で行けなくなり、登校を拒否している子どもがいる。学級担任は、子どもや親との面接関係によって理解し助言して回復を図る努力を続けようとするが、なかなかうまくいかないのが実情である。

教育センターにおいては、親や子どもや担任の相談を受けているが、登校拒否の事例では、子どもが自分から自発的に来所して来ることは少ない。この事例は、親は、事情もあり、来談できないでいるのだが、子どもの方は、進んで来所してくるケースである。

この研究は、教育相談の主任研修員として、学校に勤務するかたわら、週3日間教育センターにおいてカウンセリングを行った登校を拒否する中学生とのかかわりをまとめたものである。この登校を拒否する中学生との面接関係を通して、登校拒否児が周囲や自分自身について、どんな感じを持ち、何を考えているか等、登校拒否児の内面を理解し、受け止めることをテーマとして、ひとりの登校拒否児との面接過程を検討することにした。

面接過程で明らかにしようとしたことは、以下の二点についてである。

- 登校拒否児の内面やゆれうごく気持ち。
- 相談場面で、指導的立場が出てきて、悩みゆれうごく面接者の気持ち。

(この事例は、秘密を守るために、周辺的な事柄については、内容を変えてあります。)

キーワード：教育相談、カウンセリング、登校拒否、事例研究

目 次

はじめに	152	(2) カウンセラーとして 面接で留意すべきこと	154
I 主題設定の理由	152	2 実践研究 (K男との面接過程)	
II 研究のねらい	152	(1) 事例の概要	156
III 研究の方法	153	(2) 面接経過と考察	157
IV 研究の内容と考察	153	V まとめと今後の課題	169
1 登校拒否児との面接相談	153	おわりに	170
(1) カウンセラーとしての 基本的態度	153	参考文献・指導助言者	

¹川崎市立白幡台小学校教諭 (主任研修員)

²川崎市総合教育センター指導主事

はじめに

この研究は、教育相談の主任研修員として、学校に勤務するかたわら、週3日間教育センターにおいてカウンセリングを行った、登校を拒否する中学生とのかかわりをまとめたものである。

面接者は、学校現場にいる時には学級経営のために、カウンセリング・マインドの大切さ、教育相談的なかかわり方の重要性など、本を読んで分かっているつもりでいた。

しかし、実際には、毎日40名という集団との関係の中で、まず勉強を教えると言うことが中心になっていたため、頭（知識）では分かっていたつもりでも、一人ひとりの子供を受容し、理解するというところまでは出来ていなかったように感じる。

受容し、理解するということは、やはり、相談室という場で、クライアントとカウンセラーという関係になって始めて体験出来ることなのかもしれない。教育相談の臨床を経験することによって、とにかく、カウンセリング・マインドの中身としての、受容、共感的理解、自己一致について、知識としてではなく、自分の態度として、なんとなく分かってきつつあるというのが正直な気持ちである。

自分の気持ちをなかなか表明しない、出来ないといわれる中学生の登校拒否児とのカウンセリング的なかかわりの中で、登校拒否児の気持ちと、面接者の気持ちについて整理し、まとめることで、自己の相談についての反省の資料とするとともに、今後の相談のために役に立てたい。

I 主題設定の理由

「学校に行きたいと思っても行けない登校拒否児」が、年々増えてきている。川崎市総合教育センターにおいても、登校拒否児の相談の受理件数は、年々増加している。

この登校拒否児たちは、親や教師から見て、登校できない客観的に妥当な理由が見出せないだけでなく、本人にとっても登校できない理由を客観的に説明出来ないことが多い。何らかの情緒的な原因があって、どうにもならない不安や緊張から、身体症状を起こして、自分を責めたり、落ち込んでしまうこともある。また、自分で自分をコントロールすることの未熟な登校拒否児は、相手に対して、生の感情をそのままぶつけたり、まったく感情を表そうとしなかったりすることもあるので、対人関係はますます悪くなっていき、ついには、自分のことを、分かってもらえない、理解してもらえないと、学校や家庭にまで背を向け、自分の殻に閉じこもってしまうこともある。

このような登校拒否児のつらい、苦しい気持ちをなんとか理解し、受け止めること、心と心を通い合わせることに努力すること、そうすることによって、登校拒否児は閉じこもった殻から出ることが出来るようになると思う。

登校拒否児が、周囲や自分自身について、どんな感じを持ち、何を考えているか等、登校拒否児の内面を理解し、受け止めることをテーマとして、ひとりの登校拒否児との面接過程を検討することにした。

II 研究のねらい

自分自身、なぜ学校に行けないのかが分からないといった、漠然とした気持ちの登校拒否児との

カウンセリングを通して、その面接過程における、登校拒否児と面接者とのかかわりのあり方について考察する。

面接過程で明らかにしようとしたことは、以下の二点についてである。

- 登校拒否児の内面やゆれうごく気持ち
- 相談場面で、指導的立場が出てきて、悩みゆれうごく面接者の気持ち

Ⅲ 研究の方法

研究主題に迫るために、以下のように研究を進めた。

- 文献研究
登校拒否についての理解
- カウンセリングの研修（理論と技法）
- 実践研究
カウンセリング実践を通し、K男と面接者とのかかわりのあり方について考察した。

Ⅳ 研究の内容と考察

1. 登校拒否児との面接相談

登校を拒否している子どもが自分の学級に出た時、担任は、子どもや親との面接関係によって理解し、助言して回復を図る努力を続けようとするが、なかなかうまくいかない。教育センターにおいては、親や子どもや担任の相談を受けているが、登校拒否の事例では、子どもが自分から自発的に来所して来ることは少ない。この事例は、親は、事情もあり、来談できないているのだが、子どもの方は、進んで来所してくるケースである。

そこで、この登校拒否児との面接関係を通して、子どもと面接者との人間関係のあり方の中から、登校拒否を理解していきたいと考えた。

(1) カウンセラーとしての基本的態度

良い人間関係（カウンセリング関係）を作り出すために、次の三つの基本的態度が持ち続けられるように留意していきたいと考えた。

① 共感的理解

これは、相手の立場に立って、クライアントが見たり、考えたり、感じたりしているように、カウンセラーも見たり、考えたり、感じる事が出来るということで、そのうえ「わかった」ということを相手に伝えることが大切だと言うことである。

そのためには、クライアントの気持ちを敏感に感じ取り理解すると共に、「わかった」ということを言葉に出すだけでなく、あるいはにっこり笑うとか、うなずくとか、そのほか顔の表情など言葉を使わない、つまり非言語的な方法で、相手に伝えるということも、クライアントは理解してもらえたという気になるので大切なことになる。

② 暖かさ（受容）

これは、具体的に言えば、クライアントをあるがままに受け入れ尊重するということである。もちろん、クライアントに対して関心や思いやりを示すということもふくまれる。暖かさ（受容）は

共感以上に非言語的な表現をすることが多く、顔の表情、姿勢、部屋に招き入れるしぐさといったジェスチャーでも表現することが出来る。暖かさ（受容）を示そうと思えば、クライアントの言うことを一生懸命に聞き、関心を示さなくてはならない。そういったカウンセラーの態度、姿勢、目付き、顔つきから、クライアントはこのカウンセラーならば何を話しても大丈夫だという信頼が生まれてくるのである。

③ 純粹さ（自己一致）

カウンセラーは、ひとりの人間として、その話す言葉、表情、言葉の調子、やっていること、気持ちなどが一致していることが大切で、自分の心を開き、他者に対して防衛的などころがあまりないということである。

以上のような態度を持つことによって、クライアントが、情緒的、認知的、行動的という三つの面で、それぞれ適切に機能することが出来るように助けてゆくことの出来るカウンセリングの過程を目指したい。

(2) カウンセラーとして面接で留意すべきこと

カウンセリングは、言葉に表されたり、言葉以外（例えば、まなざし、うなずき、表情、しぐさ、態度など）で表されたところを伝え合うことで目標を達成させることが出来る。

そのためには、よく聴くこと、言葉と同時に言葉以外のコミュニケーション（伝え合い）で相手の心情を理解していくことが、カウンセリングのかかわりとして大事になる。

「カウンセラーが来談者とのかかわり方で不適切であるような場合を考えて、その時の言語的・非言語的な特徴をみてみよう。」と、中西信男は、言語的と非言語的コミュニケーションの総合的な考察を試みている。¹⁾ これは、面接に臨む際にも、面接場面を具体的に検討する際にも役に立つと思われるので、筆者なりに表-1としてまとめてみた。

また、面接相談における応答についても、認知的な内容への応答の方法と、感情的な内容への応答の方法とに分けて中西が説明している中に、カウンセラーの陥りやすい傾向について指摘があるので、それもまとめてみると以下ようになる。

① 認知的な内容への応答で陥りやすい点

- いくつかの文節からなる来談者の話に対して、カウンセラーは話の最後の部分に回答しがちであること。（それは、時間的に近いものに回答しやすい性質があるからである。）
- カウンセラー自身の興味とか欲求に関係があるところに回答してしまうこと。（カウンセラーの欲求や関心をその会話の中に投射してしまう危険がある。）
- くり返し（再述）を多用すると、「オーム返し」か「こだま」のような「うつろな印象」を与えてしまい、カウンセラーの気乗りのなさを暴露するような逆効果を与えてしまうことがあること。
- 新しい情報や感情をさぐり出そうとする質問を多用することでカウンセラーの質問、来談者の回答のくり返しといった「ピンポン効果」の状態になり、面接を深めるというよりも、いたずらに情報収集的となったり、表面的なやりとりで終わってしまう恐れがあること。

② 感情的内容への応答で陥りやすい点

¹⁾ 中西信男他著「カウンセリングのすすめ方」 有斐閣 1983年 40 P

表-1 カウンセラーのクライアントへの不適切なかかわり方

(言語的コミュニケーションの特徴)	(非言語的な特徴)
<p>相談に無関心で、あまりかかわりたくない場合で、カウンセラーとしてはあまり気乗りがしないし相談を続けたくない場合にみられる。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ①話し方がまとまった文をなさないで、そっけない返事で終わる。 ②話が断続的である。 ③ときどき自己非難や自己卑下の言葉を言う。 ④反射的に話すだけで心がこもらない。 	<ul style="list-style-type: none"> ①ほとんど身体を動かさない、堅苦しげな態度を示す。 ②来談者から遠く離れた対人距離をとる。 ③しばしばまなざしを避けたり、うつむいたりする。 ④ときどき肩をだらけさしたり、肩がはったような動作をする。
<p>カウンセラーのかかわり方が過剰な場合である。このような場合として、カウンセラーが面接相談に不安であるときとか、あるいは自分の感情を投射しすぎたりする場合で、いずれにしても来談者の感情に十分気づくことができない。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ①話し方は言葉数が多く、しばしば多弁さは強迫的になるという特徴をもっている。 ②話はしばしばくどく、くり返しが使われる。 ③カウンセラーの返答の長さが、来談者の発言よりも長くなることが顕著になる。 ④話す速さが早く、言葉と言葉、文と文とのあいだに間をおくことがない。 ⑤声の調子はしばしば瘤高く、大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> ①身体的動きが大きい。身振りが多く、落ち着かない。 ②たいへん生気にあふれ、表現も豊かであるが、注意散漫になりがちである。
<p>当惑させるタイプのカウンセラーは来談者への関心を持ちながら、注意集中することができないで来談者へのコミュニケーションの主要な側面でない、どうでもよい点に反応しがちである。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ①話し方は混乱させるような特質をもっている。話し手は直接話された内容について反応せず、どうでもよい、はずれたような応答をする。 ②話し方は話題をくるくると変える。 ③話題は来談者以外の他人のことに関し、また現在よりも過去のことに関して集中する。 	<ul style="list-style-type: none"> ①不適切な笑いをうかべながら、頻繁に神経質な笑い声をあげる。

- ・ 感情を反映させるべきときに「さぐり」の質問を入れてはぐらかしてしまうこと。
- ・ 感情よりも事実や出来事に応答しやすいということ。
- ・ 感情への具体的な応答でなく、抽象的な応答をしまっていること。

2 実践研究〔K男との面接過程〕

この事例は、相談臨床に基づいていますが、秘密を守るために、周辺的な事柄については、内容を変えてあります。

(1) 事例の概要

- ① 対象児 K男（男） 中学3年生
- ② 主訴 登校拒否

初回面接時における母親の訴え

中学1年生の夏休みに入る1週間前に、身体に湿疹が出来たため、夏休みのサッカーの部活には出られなかった。また、理科の自由研究にも悩み、2学期になってからも登校しなくなってしまった。休み始めの頃は、家の外に出なかったが、最近（2年3学期）は外出も出来る。一人で浅草にも出掛けて行く。また、電話にも出ている。

昔の古い家に凝っていて、段ボールでそんなものを作っている。テレビの国会中継、ニュースを見て、何か喋っている。生活は乱れていない。

学級担任とは、手紙のやりとりをしている。担任から勧められて来所したのだが、いやがらないで一緒に来た。

担任からの報告

K男は、サッカーが好きで、中学1年の1学期には部活を一生懸命やっていた。夏休み明けの9月には、1日出席しただけで、10月の中間試験に出たが、あとは全部欠席している。

担任として、月に2回の家庭訪問と、月に2回の手紙のやりとりをしながら、K男との接触を保っている。11月には「こんなことをしてはいけぬ。3学期には登校したい。」と言ったのだが、登校出来なかったため、教育センターはどうかと勧めると、「そこへ行けるもんなら行きたい。」と言う。

「ここまで来たら、どうして登校したくないのか話してほしい。」と聞いてみたが、理由は言えないようだ。「なまけたい気持ちではない。」とK男は言っている。話題が勉強について触れるとK男は真っ青な顔をしていた。

③ 性格特徴

〔母親から〕おとなしい。人の面倒みはいい。友達付き合いもあった。

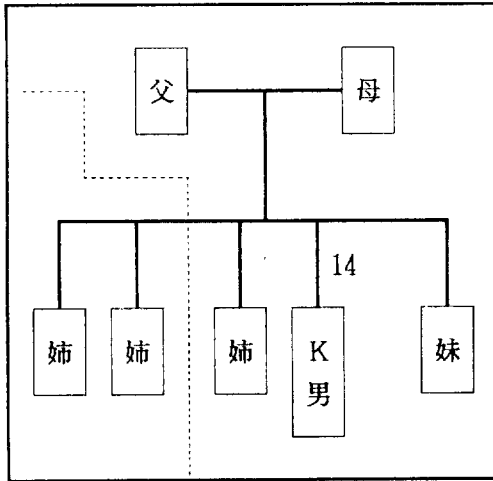
〔担任から〕感想文のやりとりで、「二十四の瞳」の感想文を読んで、やさしい子だなと感じた。テレビの国会中継や防衛問題について話した時には、「自衛隊をつぶせ。」などの意見を聞いて、大人びているなどと思った。絵を描くことが上手で、観察力もあり、色の濃淡の付け方など見事だと思う。ただ、会っている感想として、K男は都会の空気に合わない子ではないかと言う感じがし、これでは中学校でも、仲間に入れないのではないかと、社会性の面でも欠ける所があるように感じた。

〔面接場面で〕

非常に慎重で、いろいろなことに敏感に反応する感じなのだが、なんとなく、固さ、融通のなさを感じる。面接中は、緊張が強く、眉間に深いしわをよせて、一点を凝視しながら沈黙を続けている。その深刻で、ちょっと悲観的に見える表情を眺めていると、内向的で、抑圧的な性格を持っているようにも見える。面接の時にK男が作った昔のソバ屋の屋台の模型を見せてくれたが、その時には、非常に細かい所まで作ろうとするK男の完全欲求の強さを感じた。

また、担任の言っているように社会性の未熟さもうかがえた。

④ 家族の状況



父親、母親、姉（三女）、妹と本児の5人が現在の同居家族である。他に、結婚して埼玉に居る一番上の姉と、叔父夫婦の養女となって、家を出ている二番目の姉がいる。

父親は会社員（一週間交代での、昼夜勤務の鉄鋼会社の下請けに勤務する）で、平素は無口だが、酒が入るとくどくなって、飲んだ時には、普段言わないことを言うてうっぶん晴らしをする。（K男は酒を飲んだ時の父の側には寄らない。）

母親は、19才で結婚し、5人の子を産む。やさしい庶民的な感じで、K男のことを心配している。末娘を妊娠した時に妊娠中毒症を起こす。現在は、

腎臓、肝臓が悪く、微熱が続いていて、血圧も高く、入院したら、末娘がどうなるか心配に思っている。K男と同様太っている母親は、K男とは違って、大きな声で話し、家庭の問題が深そうに感じられるのだが、細かいところには気を止めていられない感じで、5人の子育ての大変さに追われている感じがする。長女は、母親と同じ19才で結婚する。（籍は入っていない）次女も、19才で叔父夫婦の養女となる。三女は高2の1学期に中途退学し、勤めに出ている。以前、登校拒否になったことがある。

⑤ 生育歴

K男が胎生期に妊娠中毒症があったと、母親は、教育相談票に記入していたが、それは末娘が生まれた時のことで、記憶がはっきりしていない。K男自身は安産で生まれ、出生時の体重は、3.65 kgあった。人工栄養だったが、病気もしなかったし、育てやすかった。言葉も早く覚えた。幼稚園の時に行きしぶりがあったが、その後は何もなく、友達もたくさんいた。サッカーに夢中だった。父親とは、小さい頃、よく遊びに行っていた。

成績は中位で、計算が速い。小学校4年生の2学期に転校の経験がある。

(2) 面接経過と考察

・ インテーク（初回面接） 昭和63年2月5日

約束の時刻より前に、母親と妹と一緒に来所してきた。色白で太ったK男を見て、あまり外に出していないせいかと思った。K男については、来所意欲のある子と、親担当から聞いていた。しかし、待合室で、母親と教育相談票に記入してもらうためのやりとりを見ているK男の緊張した、深刻な

顔つきを見ると、これからの面接に対しての一抹の不安がよぎった。中学生との面接はその時、既に4例の経験はあるものの、心の内を捉えるだけの面接関係に到っていないという思いがあった。それだけに、このケースは、来所意欲もあり、自分の気持ちも語ってくれそうだとということで、何とかつなげたいという面接者の気持ちが強かった。

◆初回面接の記録

※ 自分の気持ちを、なかなか話すことの出来ないと言われる、中学生の登校拒否児との面接なので、ラポールがうまくつけられるだろうか、カウンセリング関係がうまく成立するだろうか、と面接者が不安感を持っていたので、K男の感情に沿うというより、これだけは最初に言うておこななくては、という感じで場面構成をしてしまった。これでは、いかにも型通りという感じで、K男としてもどう対応していいか困ってしまうのが当然ともいえる始まりになっている。さらに、K男の気持ちに沿おうとせず、面接者の思いで、なんとかしてK男に話させようと、無理して質問してしまった感じである。面接者のその態度を、K男は自分に迫ってくると感じ取ったのだろうか、会話になっても、すぐ尻切れとんぼになってしまった。

面接者は、自分の不安感をなんとかしようとしていて、その不安感が分かれば分かるほど、余計な発言が多くなり、K男の感情についてはまったく見えてない状態になっている。かえって、K男の方が、一生懸命やろうとしている面接者のこと

初回面接 (T, カウンセラー)

T 今からね、一時間、何というか、K君が困っているとか、苦しんでいるとか、何か話したい事があれば、それを聞いて一緒に考えて行きたいなと考えているんだけど、……あの、まだ話せる気持ちにならなければ、バトミントンとか卓球とかということも出来るし、そういうことをしていきたいと考えているんです。……

T とりあえず座りましょうか。(はい) ………

どうかな、何か話は………何かつらくて、自分では解決つかないななんていうことでね、何か話してみたらね、良い方向が見つかってくるかなんてことがあるかもしれないね。………

まだ無理かな、(ウフフン) まだちょっと話せないかな。じゃあ、何かちょっと身体を動かす? ……ゲームあるんだけど、ゲームでもする? 下に、ほら、オセロだとかさ、丁度一時間ね、K君の時間としてね、K君が好きなように使ってい………

急に時間を使ってもいいなんて言われても困っちゃうかな…… (フフ) ………

T 妹さんは、Snoさんというの。

K そう

T 幾つ位、歳、離れているの?

K ちゅういち

T ああ、K君は中1か。

K 中2

T あっ、あっ中2か、中学2年生か。そうすると、妹さんは幾つ。

K 2才。

T ああ、2才か。そうすると、13才だから11才遊んでいるのか。随分遊んでいるんだねえ。フーン。きょうだいは二人だけ?

K まだいる。

T まだいるの。ふうーん。と、そうすると、その間にいるわけだ。

K うえ。

T あっ、上にいるの。ふーん。じゃあK君が一番上じゃあないんだ。何人きょうだい?

K 五人。

T 五人きょうだい。あーっ、たくさんいるねえ。楽しいだろうたくさんいると。

K 皆大きいから。

T あーっ。皆大きい。一番上の人は何のくらいなの?

K 二十歳になった。

T ああ、二十歳になったの、今年?

K 成人したの。

T ああ、今年成人式したの。じゃあ、7つも違うんだ。……でその一番上の人は何の人、女の人?

K おんな。

T ああ、じゃあ、一番上の人はお姉さんなんだ。じゃあそうすると、あと二人いるわけだね。二番目は?

K, クライアント)

Kが緊張していぬことを知りながら、Tの不安の解消を図ることが先に立ち、いかにも型通りの場面構成をしてしまった。

もう少しKの気持ちを受け止めるだけの余裕がほしかった。

ちょっとどうしようかな、話してもいいかな、というような感じを受けたが、まだ、動けそうにもなかった。

Kの感情が動いたところなのに、沈黙に耐えきれず、TからKにとって話し易いと思われる質問を始めてしまった。値後、K本人についてのさぐりをと思いながらも、一番無難だろうと思われる妹や姉とか周辺への質問をしてしまった。

きょうだいが沢山いると楽しいだろうなとTの解釈をKに伝えてしまっている。

を受容してくれている感じすらうかがえる。面接者の質問は、安易にきょうだいのことを訊ねたのだが、「女のきょうだいの中のたった一人の男の子で、大変だったろう。」なんて、後から考えると、女のきょうだいの問題で深く傷ついているK男がいたのかも知れずに、非常に恐ろしいことを聞いてしまっている感じである。この時にはK男の顔が段々と変わってきて黙りこんでしまったけれど、既に質問した後だし、面接者としても引っ込みがつかなくなった感じになっている。とうとう面接者の方から「じゃあ、身体でも動かすかな。」と、先に立ってしまった。

K男の沈黙の抵抗にあい、面接者はしばしばK男の話し易いと感じる方向で話題を変えていった面接であった。でも、面接を振り返ると、きょうだいや、運動の話で沈黙になっているので、それらの問題についてK男に何か心に引っ掛かるものがあるのかと思うが、深く立ち入れなかった。レポート作りとしてはまずまずという感触だったが、この次の回は、「ちゃんと来所してくれるかなあ。」と、不安もあった。

◎次回以降のカウンセリングの方針

K男はなまけたい気持ちではないが、登校出来ないでいる。

Kおんな。
T あっ、二番目も。
K 三番目もおんな。
T ああ、三番目も女なんだ。K君は唯一の男の子なんだ。上三人が女の人だと何かやりづらいことなんかあるかな。
K うふん。……前はテレビは……女ばかりだったけど、今は上二人は家出たから。
T お勧めかなんかで家出ているんだ。ああ、そうか。二番目のお姉さんと次のお姉さんは残つなの。
K 19
T ああ20才、19才と二人のお姉さんはお勧めで外に出ちゃったんだ。じゃあ、今お家にいるのはきょうだいは三人だ。お姉さんとK君とSnoさんだ。前は、女の人三人いたら、テレビなんか見たいの見られなかったろうな。(うふん)今は、そうでもないのかな。……きょうだいが五人いるなんて、大変だと思うけど、楽しいこともあったでしょう。……どうしようか……なんだか、辛い事がありそうな気がするんだけど……でも、何か話す気にはなれないかな。……
T じゃあ、少し身体でも動かす？……なんかあるから、ちょっと見てやってみる。……まだ座っている。どっちでもいいよ。……ちょっとある物で身体を動かしてみようか。……一応ちょっと、ちょっとこどもっぽいかな、アハハハハ……こんなのは使えるかもしれないね。……こんなものかな。バットとかグローブとか、パチンコもあるよ。外へ行ってもいいし、上へ行けば卓球も出来るよ。……もう一つの部屋があってね……これやる。これやる。
K はい。
T じゃあやってみよう。なんか少し身体でも動かしてみよう。……ちょっと天井が高い。いや天井が低いんだ。天井が低いから上に当たないように打たないといけなくてね。……ヨイショ……あっ、自分たちが低くなってみようか。こうやったらどうか。……だんだん続くようになってきた。……座ったままのバドミントンなんて、あまり無いけどね。……あっ、うまいうまい……案外、真っ正面で、難しいね……K君はスポーツはどんなのが好きなの。
K サッカーやってたの。今はやっていない。
T あっ、サッカーやってたの、クラブか何か？部活？(うん)何時からやっていたの？小学校から？(中学校)ああ中学校から、小学校はクラブはあったでしょう。運動はやっていなかったの。
K クラブは無かった。
T あっ、無かったのか。そうすると、小学校はこの近所ではなかったのかな？(H小) あっ、H小っていうのはH u小学校か。あっ、運動のクラブは無かったのか……
K 運動場が狭い。
T あっ、運動場が狭いのか。……サッカーか、サッカーは野球の次に人気があるものねえ。……サッカーだとすると、K君だったらポジションはどんな所かな？……キーパーかな……
T 咳してるけど、なんか調子悪いの。
K いや、昨日、病院に行ってきたの。
T あっ、病院に行ってきたの。本当。じゃあ、風邪引いているのかなあ。大丈夫かい。(はい)じゃあ、あんまり運動しない方がいいのかなあ。……此処へ来て、余計に悪くなっちゃったなんて困っちゃうもんなね。……
T そろそろ時間か……丁度、時間だね。どうだった今日やってみて。バドミントンはどうだった？
K 面白かった。

この質問をした後から何か気になる事があるように、だんだんと困ったような顔つきになっていった。姉が動いていると思ひ込んで話を進めてしまった。

Tの方は楽しかったのだろうと思っていたのだが、女のきょうだいの中の男一人と言うことで、辛いこともあったのか、眉間にしわをよせて口をへの字はまげて黙り込んでしまった。何か取り付くしまもなく自分の周りに壁を作ってしまった感じがした。きょうだい関係で辛い事があったのかと感じた。Tの方が面接への不安感が強くなると同時に、これ以上Kの内面に立ち入れないなという思いで強引にプレイを持ち込んでしまった。Kの「はい。」の返事はうれしかった。

何とかかわりを持ちたい、レポートをつけたいという思いでTの方から一方的に話しかけていった。

しばらく身体を動かしているうちに、Tも安定してきたので、再び質問を始めた。

Kの気持ちに沿うというより、Tの関心でリードしてしまっている。そのためか再び沈黙の抵抗に会ってしまった。でも、どうしてサッカーの話で黙ってしまうのだろう。疲れないかと、二度休養をさそうが、休まず続けたいと最後までやる。話をするよりも、続けている方がKにとっても安定していたのかも知れない。

口には出さなかったが、中学生とは顔を合わせたくない。

そんなK男が、その時、その時に感じている事を表現していくことが出来れば良いと考えた。

T面白かった。うん。……この次はね、遊ぶことやってもいいし、もし、何か困っていたらね、何か、こう話したいことがあったらね、一緒に考えて、何か解決策を見つけて行ってもいいなあって考えてるからね。だから、この一時間、これから、もし、あれだったらK君の時間として確保しておくから一緒に話し合ったり(はい。)考えたりしていきましょう。

Tとしても、内心はこのまま動いている方がいいな、自分も安定しているなと感じていた。

K男が、自己の感情を表現することによって、自己の建設的な感情に気づき、自己決定能力を高めていく。そうして、益々自己理解をすすめ、自己の限界の中でより自由に動ける自己を見つけれられるようになる。K男にこのような変容が生じて来ればよいと考えたのである。

そうなるためには、K男とのカウンセリング関係の中で、K男が、心の内を自己開示出来るような面接者の態度を、持ち続けていくようにすることが大切だと考えた。

初回面接では、結局は沈黙になってしまったのだが、最初の言葉かけの時に、K男の口許が動き、堅苦しげに緊張している身体が一瞬ゆるみ、ちょっと、どうしようかな、話そうかな、話してもいいかな、という風に思っているのではないかと感じた。その感じはその後の、沈黙している時の表情とは違って、K男は、自己の内面を語る事の出来る人であるという感じだった。

バトミントンのプレイで身体を動かす始めてからは、言葉は無かったが表情がほぐれてきた。

これらの事から、まず、身体を動かすことでK男とのリレーションを作りながら、言葉を媒体とするカウンセリングへの抵抗を、徐々に外していく事から始めていこうと考えた。そのために、面接者として、過剰な関わり方をしないように、K男の気持ちに沿うように努めていこうと考えた。

第1期 リレーション作り(第2回～第4回)

K男の希望に沿った形でオセロ、バトミントン、卓球等のプレイに徹する。

K男も面接者との関係を維持しようと努力している感じで、黙々とプレイに努めていた。

初回に、次も来所して来るかと心配していたのだが、2回目は、朝からの激しい雪の中を半纏姿で傘をさしてやってきた。3回目からは、面接時間を午前の一番にして欲しいと要求して来る。中学生にはできるだけ会いたくないのだなぁと思った。3回目の終了後、玄関で別れる時に「どうも有り難うございました。」という一言が聞けて、面接者として、「これで、続けて来てくれそうだなぁ。」と一安心した気持ちになった。

プレイは、ゲームと運動とK男なりに組み立てて、何をするのかを決めている感じがする。特にオセロ・ゲームは、最初、K男は遊び方がよくわからなかったため、面接者の一方的な勝ちで終わったのだが、次の回からは、面接者をやっつけようとの意気込みで望んできた。ゲームに勝ちたい、自分の方が優位の存在になりたいと、攻撃的な感情をプレイの中でどんどん表現してきている感じがする。このように、第2回から第4回は、言葉によるカウンセリングはできなかったのだが、プレイをやりながらK男なりに初回の家族関係についての諸問題の整理をつけていたのかもしれない。

第2期 社会問題へ対するK男の攻撃と弱者への思い(第5回～第11回)

オセロによって攻撃欲求を出してくる第1期のプレイを通して、K男を理解していくことも立派な、遊戯治療であるとは思っていても、もう一方に、オセロ、卓球は、カウンセリングの準備段階としてのリレーション作りだという気持ちもあった。5回目のオセロの後に、そろそろ話し合いが出来ないかなという感じで、「K君、今どんなテレビ見てるの。とさそいかけてみた。K男もさ

そいに乗って話し合いが成立した。K男は時代劇が好きで、昔の事に興味がある事、戦争とか原爆とかにも関心がある事等の話をしているうちに、父や母や祖父、祖母のこと叔父のこと等、初回にやり残したかのように家族構成の説明をし始めた。面接者に対して、し残したことをK男なりに完結させている感じである。

その後、自衛隊にいる叔父の話から、戦争についてどう思っているのかを聞いたところ、突然泣き出したのにはびっくりしてしまった。まさか、泣くほどとは思ってもしなかった。共感的理解が出来ていなかったんだなあという思いで、泣いているK男を受け入れた。

次の6回目は、泣いてしまったことで、カウンセリングに対する抵抗が生じたのかオセロだけで話し合いは成立しなかった。

7回目から11回目は全て前半はオセロで後半は話し合いになった。

話題は、日本および日本人は皆、金、金、金で、金に狂っちゃっていること、政治に無関心なこと、核戦争で、一発で終わりなのに自衛隊無くそうとしないこと等が一つのまとまりで、そのためK男は、平和運動をやらなければいけないと考えている。もう一つは、障害者の人達や生活保護の人達への思いやりがないと言うことで、国の福祉行政に対して憤っている。このような社会問題に対しての憤りとは反対に昔のもの、民芸品のような日本的なものを集めたいとか、ふるさと作って自給自足の百姓をしたいとか、鳥を飼ったり、絵や工作をしたりしていたいという自分もいるので、K男は、「自分が二人いればいい。」と思ってる。前者は「悩み」で後者は「好き」な物なんだそうで、悩みの方は、考えていて気持ちが収まらない時は、テレビに向かって指差して文句を言ったり、ノートに書いたりしている。でも、「余りすっきりしないで、寝る時も考えていたりして、夜中になってしまうこともある。」ということである。

面接者は、K男がこのように社会問題へ攻撃することで、自分の中に意識してはいないが、何か満たされない気持ちを表現しているのではないか、無意識の内に、自分を弱者と見て、それで障害者や生活保護者への思いとだぶらせていたのではないか、というように感じ取ることで、K男の中の傷ついている部分への共感的理解にもっと努めるべきだったのかもしれない。

また、雀や、燕の、鳥の話題についても、縛られないで、自由に空を飛びたいという気持ちの現れであると同時に、小さいもの、可愛がらなければいけないもの、裏返してみると、そこには自分自身が縛られないで自由にしてみたい、もっと可愛がってもらいたいという淋しさがあるのかもしれない。

そう理解しなければと思いつつも、面接者にとってK男の話題は、中学生としては、常識の世界からは離れている感じで、何か非常に大きな問題を取り上げているなという感じがした。こういう事を話題にするのは、K男が面接者に対して学校に行かないでも、こんなように社会正義を持って社会の問題を見つめられるということを示そうとしているのか、(合理化か?)または、自己について触れられないように自己から離れた話題に逃げているのか(逃避か?)とも感じられた。

第3期 学校に行っていない事についての話し合いと対決(第12回~第15回)

12回目は全て話し合いで、前半の靖国神社参拜の問題から始まったK男の世界を聞いているうちに、友達のことについての話題から、「今、学校に行っていないから。」と、学校の事についてK男自身が口にしてきた。でも、現在の気持ちではなく、整理のついた過去の気持ちである。

◆第13回 面接の記録抜粋

※ 13回目の話し合いは前半のオセロが終了した時に、K男が後ろを振り返って掛け時計を見ようとした時から始まった。今まで時間を気にする素振りを見せなかったのに、どういう事だろうと思ひながら、「時間ならあるよ。35分間。何の話しようか。」と、話し合いに入っていた。最初は、犯人が捕まったよど号ハイ・ジャックのことから、反戦、反戦と言ひながら、人殺しやったら、戦争と同じで反戦の意味がない。皆のためと言ひながら、英雄になるため、自分のためにやってる。反対に右翼の××隊も、反日分子をとか言ひながら、自分の方が反日みたい。左も右も心はあるんだろうけど、やってる事は違う。何が、愛国心かわかんない。平和について、政治家は、××隊とかの裏についてる感じで、言っても何かやってくんない。等々の憤りを訴えてくる。「で、そういう事考えているから息詰まっちゃってるのかな？」に、「それでも、まだ先ある。20才ぐらいまでの間にいろんなこと考えて、就職して、それで資金とか、……」と、K男の考えている平和な日本にする為に、これから仲間集めてとか、妹とかに教えている等の答えが返ってきた。話を聞いていると、K男の考えている事も、憤りも分か

第13回目面接 (T, カウンセラー

Tついでに、まだ聞いてなかったんだけど、話してくれるかなあ。……もし、いやだったらいいけどね。……どうしてK君は学校に行けなくなっちゃったのかなあ。
K行きずらくなっちゃった。
T行きずらくなっちゃった。どうして。何でだろう。……
K時計ばっかり気にするようになった。
Tあーっ、K君が時計ばかり、気にするんだ。K学校では何か落ち着かない。
T落ち着かない。
K心が安定しない。
Tあーっ、何か心が安心しなくなっちゃった。時計ばかり気になるようになった。
K家に早く帰りたい。
T家に早く帰り、うん(帰りたい) 帰りたい。……時計ばかり気になる。何か、特に、何かそこら辺、自分で考えたとか、そういう事はない。どうして、こんなになっちゃったんだろうなんて。……時計が……うん……
K自分の気持ち、だるくなっちゃう。
Tだるくなっちゃう。勉強ということにだるくなっちゃう。……
K学校。
T学校。……学校、学校のどういうところなんだろう。……
K雰囲気っていうか(うん) 勉強と部活をして(うん) それがいつも夕方に帰って(うん) それで疲れて寝る。(うん)
Tそういう事がいやになっちゃってきた。くたびれちゃったっていうか、学校へ行って、勉強して、部活やって、疲れて、で、帰って寝るだけだっていう……
K夏休み(うん) 最初、1年の時(うん) 夏休みの1週間ぐらい前(うん) ここ(腕)になんかポツポツができて……
Tうん、湿疹ができてしまったのね。……
K休んで、9月行ったら、なんか身体悪くなっちゃって、(うん)だるくなっちゃって、学校(うん)家に車で送ってもらって、(うん)それから20日間、その位行かなかった。
Tうん。……あの、そのいかなかった時は身体がだるいって、そういったことで行かなかったわけ……送られて、帰って来て……
K行きたくなくなっちゃった。
T身体が何か言うことを利かない感じだった。……そうではなかった。
Kすぐ治ったの。(うん)
Tあっ、身体の方は治ったのね。でも、気持ちがついていかなかったの。……ふーん。……その、湿疹みたいなのが治って、で、だいぶ間が開いていたわけでしょう。
K夏の前。
Tうん。あーっ、夏休みの前だったわけか。それについて、何か言われたとか、そういう事はなかったわけ。何かできてるとか、……手の、なんだとか、そういうことはなかった。
Kない。
Tなかった。
Kそういうのには気がつかなかった。
Tあっ、気づかなかった。ふーん。でも、自分では気づいて、あっ、湿疹が吹き出ちゃった。……ちょっとだるいなあっていう感じで、……
Kそこへも気が付いて。……(うーん)……
Tサッカーかなんか部活やってたんだねえ、……部活はその湿疹で、あれ、出来なくなっちゃったってことかな、……
Kすぐさ、病院行って(うん、うん) 病名分かった。(うん、うん)……そんな酷くない。

K, クライアント)

「もし、いやだったらいいけどね」と言ひながら、強引な質問をしている感じなのに、Kは、よく答えてくれたなあ。

時計が気になって、落ち着かず、心が安定しなくなってしまうているKの気持ちについて、もっと聞き出したいという、Tの思いを強く出した質問をしてしまっている。この時のKの気持ちを受け止めきれなかった。

なぜ、勉強と部活でくたびれて、家に帰って疲れて寝るという生活に疑問が生じたのだろうか。学校では、何か落ち着かない、心が安定しないと言っているKの気持ち、感情に共感的理解をしていくというよりも、学校のどこいうところなんだろうとか、気持ちよりも事柄に反応しすぎている。もっと、Kの感情に沿った応答が出来ないのかなあ、と歯痒い思いがする。Kの辛い気持ちもだが、登校拒否した時の事実経過も知りたいというTの心のゆれうごきが出ている。

ここは、誰かに何かを言われたので行けなくなってしまうのではないかと、Tの関心で質問をしている。Kの応答もそちらに変わってしまった。

らないではないが、何か地に足が着いていない感じになってしまふ。そこで、ずーっと考えているそう言った事は、誰かの考えについて、聞いたり、読んだりしたからなのかな?とか、どこからそういった考え方というのかなあ、生まれてきたのかな?と、面接者の方から質問をすると、特に誰かに影響されているということではないが、戦争とか平和についての本を見てたら、そういう事を考えるようになったということである。そして、そういう考えは、学校に行っていたら気づかなかったと言う風に言ってきた。これだけの考えは、学校に行っていたら気づかなかった、学校に行っていないから気が付いたと言うような事や20才までは考える期間と言っている事も、何か、K男が自分自身の現状を合理化しているような感じがしてならなかった。

その後、前回は学校についての話し合いが出来たので、今回もという感じで迫ってしまった。面接者の質問にK男も良く答えてくれ、二人の間に確かめ合う雰囲気が出来かかったのに、面接者の方がK男の感情よりも事柄に反応してしまっているの、深まらずに、中途半端に方向転換してしまった。時計が気になって、心が安定しないので何か落ち着かない。だから、学校に

T ああ、そんな酷くない。
K 病名、忘れちゃった。
T お医者さんは大したことないっていう感じだったわけ、……でも、その、なんとなく身体がだるいっていう感じで、……
K 心が……
T 心、ああ、気持ちが、……
K 行きずらくなった。……で、始業式にも行かなかった。
T ああ、9月の……
K 7月(あつ、7月)1学期の終わり。
T あつ、1学期の終わりか。あつ、さっきから話してたの夏休み中じゃなくて……
K 前、一週間。
T あつ、夏休みの一週間ぐらい前から、で、送って帰ってもらって、出なくなつて、……20日間行かなかつたっていうのは9月になって、2学期になってから、(うん)ああ、そうか。
K その時、車で送って貰ったの。
T あつ、車で送ってもらったのは2学期か……あ、そうか。
K 藤麻彦みたいのは1学期。(1学期で)自分で病院行ったの。
T 自分で、……それで始業式にも何か気持ちが、気持ちの方がついていけなくなつて、出られなくなつた。……9月には行ったわけだ。で、行ったけれども車で送ってもらつた。……
K 1回行った。
T あつ、1回行ったわけだ。
K それで、10月の中間試験、二日、二日続けて行ったんだけど、やっぱり、その時、時計とか……(うん)
T 時計が気になる。……さっきも、ちょっと時計見たよねえ。
K 君、あのオセロ終わった時チラッと見たけれど、気になる時計。
K 今はもうそんなことないけど、……今は、話し……
T ああ、どのくらいあるかなつて。ああ、そうか、そうか。
K その時、夏休み、全然、外出なかった。
T 出なかったのね。うん。……その時さ、どうして夏休み外に出られなかったのかな……それを考えたことない……
K 皆に、会いたくなかつた。
T あつ、会いたくなかつた。(ふふふふ)
K そこが間違ひ。
T あつ、自分でも、そう思う。(うん)間違ひだつて。……でも、そこに重大な事が何か、隠されているような気もするよねえ。……皆に会いたくなかつたってことが……何故会いたくなかつたのか……
K 弱つたの。うふん(あつ)一週間、丁度、夏休み一週間、うふん……
T あつ、これは何でもなかつたのに、自分の気持ちがついて行けなくて休んじゃつたわけだよ(うふん)……その事について何か言われるんじゃないかって「お前、何で休んだんだよー」つて。……それが間違ひだつた。(うふん)っていう感じがするんだなあ。今は。
K 今は、何か家で過ごしていけちゃう。はっはっはっはっ
T うーん、今はね、……何となく、家の中で過ごし方みたいなものが……パターンてのかな、できちゃつたっていう感じ。
K そういふの段々。雀もいたし。(うん、うん)自分で勉強したし。(うん、うん)
T 自分の勉強っていうのはどう、どんな勉強しているの。
K 国語は、何か俳句作つて、あと読み書き。あとは計算。(うん、うん)その他、……四月は、全然やつてなかつた。
T あつ、やつてなかつたの。
K 俳句しか作っていない。(うん、うん、うん)あとは、ただ絵描いたり……あと、もう一年しかない(うんうん)

Tの方が身体のレベルで応答しているのにKの方から身体ではなく、心、心の問題なんだと出てきたので、びっくりした。折角、Kの気持ちに沿いながら聞いているのに、事柄に反応してしまつたためにちょっと、ズレてしまつた感じ。

この辺りから、ますますTの関心で質問を押し付けていくような感じで、Kの気持ちに沿うというより、Tの感情を投射しすぎた感じになってしまった。それにもかかわらず、Kはその質問によく応答してくれている。

Kの気持ちにそのままついていけばいいのに、Tは余計な解釈をしてしまつて返している。

ここも、Tの枠組みでの応答になってしまった。そのためKも、気持ちについて話し合うより楽になったのだから、話題がそちらへ流れてしまった。

行きずらくなっているK男の気 漢字とか、計算とか(うんうん)1学期は、一年。
2学期は二年。3学期は、三年やるの。
持ち、家に車で送られて帰って T ああ、復習しようっていう、うーん。……自分なりに計画を

きたK男のつらい思い等にK男と同じ立場で感じていこうとしながらも、もう一方で登校拒否に到ったその時の事実経過も知りたいという思いが面接者の心の中に沸き起こってきた。面接者自身が、自己一致していないので、面接者の興味・関心を前面に出して、折角のK男の協調的な気持ちに対して悪かったなという感じである。

14回目は日本砂漠化とかそういう … という事から話し始めた。木が無くなってビルになって、… 資源無くなっているのによその国から木を輸入してタンスとか新製品ばかりすぐ作る。古いのは捨てて新しいのを買う。何か、日本は何でもゴミになっちゃう。… やっぱり、今、世の中の価値が金に統一されている。… やっぱり、もっと、国土緑化盛り上げなくっちゃ。そういうのもっと金を使った方がいい。と、相変わらずといった感じで、自分が政治家か何かのように社会の大きな問題を憂えている。

ここへきて、面接者は、K男がこういう社会問題を攻撃することで自分を表現しているんだ、毎回繰り返して話してくるK男の世界の枠組みを通して、K男を理解していく事が大切な事なのだと、分かっているながらも、面接者の内部に生じてきた、でも、いったい何時までこういうK男を受け入れていけばいいのだろうかというジレンマに決着をつけたくなくなってしまった。

既に、K男は外へも出られるようになってるし、12回目や13回目の面接では学校についての話題にもそれ程の抵抗を示さなくなってきた。そこで、K男に、もう戦争とか防衛とか平和運動とか、その他の、K男自身から遠く離れた社会問題についてではなく、K男自身のこと、生い立ちから、お父さんのこと、お母さんのこと等、自分自身についてやっとうと、対決をしたくなったのである。K男が、学校に行かなければならないと思いつつも、行けない自己と、対決することによって、自己決定力を育てることが出来るのではないか、自我の成熟を図ることが出来るのではないか、と考えたのである。

ところが、面接時間が残り少なくなって来たので、面接者の方から対決を迫っていったのに、このままでは中途半端に終わってしまう。これではまずい。今日は、もう早く決着をつけたいと、面接者自身の不一致状態をなんとかしようと、強引に出してしまった。でも、K男の沈黙の抵抗にあって、何か、すごく難しい事をK男に要求し始めちゃってるなど、面接者の内部にまたジレンマが起きてきた。最後は、K男も面接者も両方とも自己不一致のまま面接者が強引に「自分って何か」をやっとうと、押し切ってしまったという感じになってしまった。

15回目は、オセロを二回続けてやり、話し合いの時間はほとんど持てなかった。これは、面接者の要求が、K男の気持ちに沿わないものだった、というK男の抵抗の現れだと思った。K男はまだ社会問題を話題にする事で、自己を表明しようとしているのだ。そのK男の気持ちを十分に受け止めて行くことが、まだまだ必要な段階だったのだ。面接者の方から動いてしまうのではなく、K男自身がリードしてくるのを待たなければいけないのだということを痛切に感じさせられた。

しかし、オセロが終わってから、ほとんど時間が無いなかで、K男が、従来までの話題で話してきたので、ああ、まだ、直接自分自身について触れる事は無理なんだなあ、という思いでそれを受け入れた。

第4期 再び社会問題に対する話題 (第16回～第21回)

面接者の方から強引に対決を迫っていった為に、15回目にはK男の抵抗に会って、ほとんど話し合いが出来なかった。だが、最後にK男の方から、それまでと同じような形で社会問題を話してきたのを面接者が受け入れたので、16回目以降も、同じような内容で、話し合いが続いた。

ただ、面接者としては、同じような内容であっても、第3期の頃のようにジレンマに陥ることなく、K男自身の問題として話してくるんだなぁと、余裕を持って話し合いをする事が出来た。

第4期は第2期と同様の話題が続いた。『今の日本を見てると頭にくる。金があれば何でも出来ると思っている。一番怖いのは、食い物の有り難さを忘れていること。金、金そこが一番腹が立つ。』『国が金に狂ってるみたい。国民の金は喜ぶ方ではなく悲しむ方に使っている。身障者への態度、思いやり、心の持ち方間違えてる。国は福祉から遠ざかっている。』と、相変わらず憤りを込めて話している。金があれば何でも出来る世の中のはずなのに、金とは縁がない貧しさに満ちたK男自身の現状を社会に対して攻撃することで補償しているようにも見える。身障者、福祉問題についても、病気に悩まされている母への思いがあるのかもしれない。面接者がK男を受容することに努めているので、『××隊とか平和公園の千羽鶴を焼くとかバットを持ってぶっこわすとか、そういうの許せない。そういう野郎は刀でぶった切りたい。』等と過激な事を言って、K男の世界をどんどん出してくる感じがする。

17回目には戦争と平和についての自説の根拠を示す為にか、中学校の公民の教科書を持って来て、教科書の憲法9条の戦力の放棄について読んだ後、憲法前文をじっと読んで、平和のために、日本は戦うことはしないはずとって沈黙していた。また、21回目には『日本の侵略、中国、韓国編』という写真集を持ってきて面接者に見るように勧める。そして、写真見たので、言葉だけでなく、虐殺があったって分かった、と言う。

19回目には、戦争が起きたらどうするかという話になった時に、突然、大粒の涙を出しながら泣き出した。K男が見てきた「火垂るの墓」の映画の話をする中で、食料難のために栄養失調で死んでしまった主人公の妹に、現在、頼りにならない姉や、身体の調子の悪い母親に代わって一生懸命に面倒をみている妹をダブらせて、本当に妹を死なせてしまったような気持ちになってしまったのだろうな、と共感することは出来た。

21回目に、「ただ、時間が流れちゃってる感じ。」「今を、本当に精一杯生きなきゃ…」と、K男の気持ちについて出してから、「やっぱり、本当は学校に行くことなんだと思う。」と話してきた。でも、今は、自分では絵を描くこと、時間を大切にすることで、「学校に行っていないってことで悩んじゃだめだってこと。」「学校へ行っても、趣味でも何でもいいから、何にも負けないで生きていくってこと。」と現状を何とか肯定的に見ようとしている感じである。「学校に負けたけど……」と、出てきたので、「どういうことかな、負けちゃったってこと？ どういう風に考えてるのかな、よくわかんないけど？」と、返すと、「亀みたいに、家に引込んだってこと。」なんでだろう？「学校行ってもやる気がなくなっちゃった。」「学校行って、何かだるくなっちゃう。自己中毒。自分でだるいと思ひ込んだ。」「今は、何か、学校のこと頭になくなっちゃった。」等々、K男の学校に対する気持ちを話してきた。でも、現在のというよりは過去の整理された気持ちである。

第5期 自分と関わりのある昔に触れ出す（第22回～第26回）

第4期に教科書や写真集を持ってきて、面接者に見せたことで、自分の話している事はこれだけの根拠があるんだ、こういう物に基づいて考えているんだと、分かってもらえたと思ったのだろうか、話の内容が少し変わってきたように感じる。

22回目、23回目と、前半は、卓球をする。15分位やると、息遣いが荒くなり、「ちょっと、休みます。」と、床に座り込んでしまう。家の中に居て運動をほとんどしてない為だろうか、すぐ、息切れがするようである。22回目は小袋の中からキャラメルの空き箱を取り出して、昔の広告が描いてあると見せてくれる。面接者も、懐かしがって一緒に見ながら話をする。K男は森永の工場に見学に行った時、キャラメルを貰ったこと、を懐かしそうに話す。それから、小さい時、きょうだい4人で、200円分のお菓子を買ってから、ビニール袋に入れて分けたことを話す。色々買って仲良く分けたと話す。それから、今、三番目の姉が家に戻ってきたこと、二番目の姉とはよく喧嘩したけど、本を貸してくれたり、何処かへ連れて行ってくれたことを思い出すように話す。その後は、前の小学校の頃の遊びについて、夏はプールとか、一番風呂に入りに行くなど、いい思い出だった。こっちより楽しかった。という感じで、小さい頃の遊びの思い出を楽しそうに話してから、最後に、「子供の時が一番いいや。」と言う。今回は、K男の小さい頃は、K男にとって本当に楽しかったんだな♫ということ、面接者も共に感じ、受け入れていたので、面接が終了しても、何かほのぼのとした感じが残った。でも、それだけ現在の自分を受け入れられないK男がいるんだな♫という思いもあった。23回目には、今、鳥の絵を描いたり、和紙で童を作ったりしていると、話し、夜は、母と妹と三人で散歩のようにして姉を駅まで迎えに行ってることをなんとなく恥ずかしそうに話す。そのあと、父親が拾ってきた捨て犬のことから始まって、小さい時に見た夜景の怖かった思いで、母親のお腹かの中にいた時の事を覚えているほど記憶力が良いこと、防災の為には細心の注意をしていること等話す。でも、話し合いの最中でも、飛行機が落ちてこないかと心配していると言うのだから、少し異常なくらい心配性だなという感じがした。話は過去のことでも、K男自身に関わることになりだした。

24回目に、突然、「箱庭をやります。」と、30分位かけて作る。「古い物が新しい物に飲み込まれていく。」というイメージを作りあげる。箱庭を作ったのは、今回だけであった。

その後、話し合いに入り、「平和運動やってさ、右翼に狙われたりするよりさ、別に有名になんかならなくても、無名の方がいいんじゃないか。」「今死んだら一生浮かばれない。生きている時が一番いいんじゃないか。」「金にこだわりたくない。いつも、あせらないでいられればいいや。」と、言いながらも、最後には「でも、やっぱり金がなけりゃ……」と言う。理想としての生き方の中に、現実がふっと出て来る。自分の考えと対比した考えが出て来始める。

25回目は、ノートに描いた「草むすかばね」の絵を見せてくれる。テレビで見た場面だそうで、そこから話が始まる。「なんか戦争がわかんなくなっちゃった。」「前は一方的にさ、兵隊が悪いと、なんとなくそうだったけど、今は、戦争だけが…」「なんとなく国はさ、皆の命を自分の物だと思っているんじゃない。」「今あるのは、そういう人たち、死んだ、犠牲になった人たちのおかげというのか…」と話ながら涙をポロリとこぼした。世界は、K男自身が考えているだけの世界ではないのだと、何となくK男の世界の枠組みが広がって行きつつあるのかな♫という思いで聴いて

いた。

26回目は、オセロとバトミントンをする。なんだか初期の頃に戻って、今までの面接経過を振り返っている感じがした。K君に、何か変化が起きるのだろうか ……と、ふっと、思った。

第6期 話題が自分の進路について触れ出す(第27回～第49回)

27回目。「もう二学期。……早いねえ。」「それで、三学期は進路。進路は就職か進学か。来年はわからない。また、中3かな?」と、話題が自分の進路ということに変わってきた。「で、K君としてはどうしたらいい?」と聞くと、「就職か…」と、何か人ごとみたいな感じで言葉が返ってきた。それから、「卒業できなくちゃあ、進路決められない。学校に行ったら捜がす。」と、学校に行っていない自分には、まだ考えるには無理な問題だと思っている感じもした。でも、具体的にどんなことがしたいのかと問うと、赤べことか作る職人になりたいと思っているが、それも、学校に行っていないので学力の基礎が付いていないので駄目かなとも考えている。そのことに、夏休み中に手伝いにいった叔父さんの所で気づかされたと言う。自己に責任が有ることに気づき始めたのだが、とうとう進路については、「そのことについて、あんまり悩まない方がいい。」「見通しつかない。なんとかなるといふより、自殺に追い込まれちゃう。」「半年後のことなんか分からない。」「と、問題に対して防衛的になり、近付こうとしなくなってしまった。最後には「学校に行ってる人と、すぐ一緒だと思っちゃ駄目。」と、折角、自分の進路について触れ出したのに、学校に行っていないということで全て駄目だというように思い込んでしまっている感じがした。

28回目。29回目と、進路については「その話はしない。やめだ。」と言って、ある宗教や、ピルマの内乱、天皇が死にそう、国が全体主義って感じがする等と、従前の話題が出てきた。

30回目は、「家に帰って考えたけどさ、もうあれ考えない。平和のこと。もう普通に生きていく。働いて。」「余裕はないと思う。勝手なことしてちゃいけない。」と、再び自己の現実について見つめだそうとしだした感じがする。進路について、見つめなくてはいけないと思いながら、でも触れたくない、ゆれ動くK男が感じられる。

◆ 第31回面接の記録抜粋

※ 31回目。将棋が続いていたのに、突然オセロがやりたいと言ってくる。将棋が負けているのでオセロで挽回を図ろうとしたのだろうか。でも、これもK男の負けになってしまう。「先生、あの、今の一家団欒って何だろうね。と言うことから話が始まる。面接者は、K男から質問が出てきたので、K男自身の一家団欒についてやっていけるのかな、と思って応答した。ところが、他の人とか、世の中

東31回目面接 (T, カウンセラー K, クライアント)
Tさあ、あと25分位ある。……何か困っちゃったっていう感じ。
K先生、あの、今の一家団欒って何だろうね?
Tうん。今の一家団欒って何だろうね?……一家団欒ねえ……K君は?……何となく一家団欒というのが分からないというのか、自分に無いという感じがするのかな。
K有るっていうか、違いが……(うん?)皆と違う。僕の
Tああ、今はそれが一家団欒という感じだという。
Kうまく言えない。それが自由であるとか。今、日本は炬燵に入って、みかん食って(うん、うん)一家団欒って……
Tでも、何か気になる。それでいいのかって。そういうことかな。
K他の人とか、世の中の一家団欒ってどういうのかって。
Tその辺ではK君のところは皆で時代劇のテレビ見て、面を見てる。(うん)他の家はどうかかっていう感じ。……
K今だと、ファミコンじゃない。
Tあーっ。一家団欒はファミコンじゃないかって。
K皆でやってる。
T何となく言葉が無い感じだねえ。(ふん)……
Kもっとしゃべった方がいい。……

今回は、Kの方から質問が出てきた。
何となく、Kが一家団欒という言葉から遠い感じだったので、自分には無いという感じがするのかなと返してしまっただけ。
この辺りは、Kが言い出したことに関心を持ちながら応答しているがTはKの言っていることがよく分からないでいる。
K自身の一家団欒についてやっていけるのかなと思っただけなのに、他の人とか、世の中の中のこのだからとまどった。

の、と返ってきたのでとまどってしまった。自分から出しながらも、自分のことと突き付けられると逃げてしまうK男についていくことで、K男が自分自身と対決していくように考えた。ところが、面接者が自分の関心に引きずられたために、関わり方が過剰に成り過ぎたのかK男の感情に十分気づくことが出来ずに、カウンセリングが進んで行き、とうとう「もういい。」と、K男の方から一方的に打ち切られてしまった。しかし、その後、別の話題になったが、再び戻って、「自分が内弁慶の内弁慶で、ねえちゃんとかは普通に話せるけど、親と話が弱い。」と言ってから、「でも、やっぱり家が一番暖かいなあ。」と話してきた。

36回目。将棋の後「今、どんな気持ちでいるのかな？」の問いに、「一週間。早いなあって。「だから、三月なんかあつという間に来るんだろう。」と、言ってくる。「気になるよねえ。」と、返すと「そういう気持ちがない。もう、あまり考えない。」「ただ、ぼーっとしている。」「家を出てからのことはね、考えてんだ。」「平和とかね、最近考えなくなった。」と話した後、どういう物を作りたいかという、木を使う方で、民芸品か日用雑貨に分かれて、どちらかに決めかねていると、まだ漠

T ああ、やっぱり、あんまりしゃべってないという感じ。
 K ふん、ただ皆で笑っている……みかんと炬燵の方がいい。
 T うん、うん、うん、なんとなく昔、同一方向で、面白ければって、ファミコンだったらテレビの画面見ちゃって(うん)炬燵だったら向き合って……
 K 四方がある。(うん、うん。)……
 T 何かそうすると、話したいことも話せないっていうのか、聞いてもらえないっていうのか、そんな感じかな。
 K 話したい事もない。
 T ああ、自分の方でも話したい事はあまりない。(ふん)……
 K 段々こういう時期は話しづらい。(話しづらい)皆段々そうなっちゃうの。気難しい。
 T ああ、気難しくなっちゃったのね。
 K 大人になってきたら、また何か子供の頃の(うん)話し合いしたい。
 T 何か、今中途半端みたいで(ふん)はっきりした大人になっちゃったら大人同志の話しが出来るのじゃないか、何かそんな感じ。(うん)じゃあ、今、K君は何話していいかが、家の中で、お母さんには何話していいか、お父さんには何話していいか(ふん)が非常に困っちゃうっていうか、お互いが遠慮し合っているっていう感じ……。 (こっちが)自分がか
 K あと、話題といえば芸能人(うんうん)芸能人……(うん)
 T 何かお父さんに言いたい事もあるんだけど……芸能人みたいなことじゃ話は出来るけれども、そういうことじゃないって……(うふん)……今、どういう所がお家で話にくいK君としては?……何か、やっぱり気まづくなっちゃうんでしょ。(うん)ねえ。どういう所なんだろう。…何か、話したらお父さん聞いてくれそうもない?……
 K 聞いてくれるけど。……
 T うん。聞いてくれるけど…何かこうびたつこない。(うふ)
 K どういうものかなと思っただけ。
 T どういうものかなって、それはどういうことかな?
 K 他の家は、一家団樂って…(うんうん)…うちの一家はこれからだと思う。
 T あっ、これからだと思う。
 K うん。まだ何か、家族旅行も行ったことないから。(うんうん)自分で行くしかない。
 T うん、自分でね。あっ、K君がそういうことやりたいうこと(うん)あーっそうか。何か一つにまつまったものがまだ……

みかんと炬燵というのは昔にあったKの一家団樂のイメージを出して来ているのだろうか。

この辺も昔はよかったということの意味しているのだろうか。

Kに話させずに、Kが思っているだろうとTの方が解釈してしゃべり過ぎている。一方的にTを押し付けている感じになっている。

ああ、これがKの一番気になることだったんだなあ。聴けていなかったなあ。家族の団樂はKが中心にならなければ、と言う思いが出てきているのだなあ。というように感じた。

◆ 第37回 面接の記録抜粋

第37回目面接 (T, カウンセラー
 T 考えてることどんな事でもいいや。……
 K 将来のことが(うん、うん)……
 T やっぱり将来のことが頭に浮かんでくる。(うん)……
 K とうちゃん定年5年だから、それで、働けるまで働けるって。それで、60まであと10年。(うんうん)それから、妹はせいぜい中1ぐらいか(うんうん)そんな時に飯食っていける仕事じゃないと。(うん)
 T あー、あー、自分自身でやっぱり面倒みなければいけないっていう気持ちがあるのね。
 K やっぱり自分で店持つのがいいのかな。あはっ。(うん)
 T 店持てるようになったらいいのかな。
 K あの、何か雇われとかじゃなくて、親方がもう死んじゃったとかで、また他の仕事に(うん)いくとかじゃあしっかりしてない。駄目だ。
 T ああ、何かしっかり安定してないと駄目だっていう感じね。

K, クライアント
 「やっぱり」と、Tの関心を示す言葉がでてしまう。
 将来の仕事について、現実的な考えが出て来始めた感じがする。
 Kの求めている事が、しっかりしていないのでは、という不安な思いが表明される。

然とした将来像を語り始めた。
まだK男が以前から言っていた好きなものにこだわっている感じがする。

48回目には、具体的な仕事として、叔父さんのやっているタイル張りの仕事に期待を持っていたのだが、それも太りすぎだと断られたと話す。結局、やりたくない、合わない、と言っていた父親の仕事をする決心だと言う。それから、面接は卒業してからと言われたので、卒業出

来るかどうか心配になってきたことを話す。49回目。来所するなり、「学校から電話が来て、それで、卒業出来るって、… それで、会社は、面接18日。」と、うれしそうに話す。それから、将棋をした後、「でも、早いねえ。去年の2月5日。… 最初。… うん。今日で終わりだ。」と、終結宣言をしてから、「ここに来てよかった。」と言ってくれたのは、うれしかった。

V まとめと今後の課題

この事例は、1年1カ月の間、殆ど、毎週1回の面接で、どうにか終結に到ったものである。

K男とのカウンセリングとしては、K男の核心から外れているとも思える、戦争、死、平和等の話題を、K男の納得のいくまで共感的に理解することがなければ、先へ進めないという事が分かって来たのであるから、あせらずに、K男の心情に沿った面接を継続していくようにしていった。そして、その面接は、K男が話したいだけ話すことで、すっきりするだけでなく、自己の問題として、自分自身の課題に挑戦していくことが出来るようなカウンセリングになるようにしたいと思いがら行った。その結果、K男としては一応の整理がついたのか、「もうあれ考えない。平和のこと。」と言って、より自己の問題としての将来の仕事の事について触れ出して来た。

だが、K男を取り巻く社会はK男が理想とするものとは程遠い。自分でこうしたい、こうありたいとねがっても、現実の自分の姿とはギャップがありすぎる。K男の感じている社会に対する疑問や矛盾を、そのまま疑問は疑問として尊重していくことで、K男の成長を見守っていきたいと思う。そうすることによって、K男自身が問題や悩みの本質を発見し、自分で悩みを解決することも出来るようになるのだと思う。K男も、相談室に来たので暴走しないで済んだと言ってくれた。

これまでの面接経過をまとめてみて、気が付くことは、やはり、学校の教師による教育相談になってしまっているな、ということである。面接者がそれまでに身に付けていた教育指導における「統制、禁止、抑圧」といった原理が無意識のうちに顔を覗かせ、教育相談の「受容や解放」を原理とする態度を、押し退けている場面に気づかされるからである。

また、教師として身についてしまっている、ともすると、評価的になる習性とか、一方的に自分

(うん) 10年間あるんだね。あとね。K君の考え
では。
Kでも、… (不明)… そういう物が消えていっちゃうか
もしんない。
Tうん、うん、ああ、自分のやりたい物が、やってい
る間に…… (うん) …… 皆の求める物じゃなくなっ
ているんじゃないかって、そういう感じ。
Kうーん。だんだん受け付けられない。
Tああ、受け入れられないというか、受け付けない。
…… そうなりそう。予想として？ (ふん) …… そ
こが問題だよ。自分のやりたい物が10年後、例
えば10年後だったら10年後、一生懸命やってい
て10年経ったら世の中に受け入れられない物やっ
ていたんだってことになりそうなのか。(ふん) …
そうじゃないのかっていうの、ねえ重大な問題だよ
ねえ。それは。
K自分は、何か作っていたい。物を作っていればい
いけどさ。
Tうん、うん、自分の気持ちとしてはね。(うん) 作
りたい物を作ってみよう。うん。そうすれば、自分
はいいけども、さっきのことが問題だ。…… ひっか
かっちゃうと。
K長男だしさ。皆な嫁にいっちゃう。(うんうん) ふ
ふん……
T長男だもんねえ。……

自分のやりたい理想と生活
の糧を得るという現実との
不一致についての自覚が出
てきている感じ。

男として、長男としての自
覚も意識されている。

を押し付ける習性とかも出てしまっている感じがする。カウンセラーとして、これらを克服していくためには、クライアント中心のカウンセリングの基本的態度である「自己一致」「受容」「共感的理解」が身に付くように、更に努力をしなければならないと思う。

ともすれば、子どもの、表面的に見えている問題行動に目を奪われてしまい、その子の全体の姿を偏りなく見ることが難しい立場にある教師は、子どもを外面的・部分的に理解しがちである。カウンセリング・マインドによる子どもの内面的理解は、それまでの外面的・部分的理解に基づく、固定的で断定的な子ども像を変えていくことができるはずである。

このカウンセリング・マインドの中身としての「自己一致」「受容」「共感的理解」について、相談室という場で、クライアントとカウンセラーという関係になって初めて、知識としてではなく、自分の態度として分かって来たような気がする。教師として、指導の原理とともに、受容の原理を持って子どもと接していけるよう、これからも研修を続けていきたいと思っている。

おわりに

二年間にわたる教育相談室での、親や子どもとのカウンセリングやプレイ・セラピーを通して、聴くことの難しさを痛感させられた。よく聴くと言うことは、カウンセラーとしてクライアントをありのまま受け入れて（受容）、クライアントの気持ちをそのまま聴いていこう（共感）とする態度である。まだまだこの態度を身につけるまでには程遠い感じがするが、この教育相談室での研修で得たものをさらに身に付けられるよう努力していきたい。

最後に、この研究を進めるにあたって御指導・御助言下さいました多くの先生方に心よりお礼申し上げます。

・引用・参考文献

- 1) 中西信男他著「カウンセリングのすすめ方」 有斐閣 1983年 40P
- 水島恵一他編「カウンセリングを学ぶ」〔新版〕有斐閣 昭和62年
- 安村重巳「教育相談の実際」—親と子の悩みにこたえる— 創元社 昭和54年
- 岸田博他「カウンセリングの学び方」道と書院 昭和59年
- 詫間武俊・稲村 博編「登校拒否」どうしたら立ち直れるか 有斐閣 昭和55年
- 佐治守夫・神保信一編集「現代のエスプリ・登校拒否」至文堂 昭和54年
- 小泉英二編「登校拒否」—その心理と治療— 学事出版 1973年
- 小泉英二編「続登校拒否」—治療の再検討— 学事出版 1980年
- 佐藤修策「登校拒否児」 国土社 昭和43年
- 神保信一編「登校拒否児の理解と指導」 日本文化科学社 1984年
- 神保信一編「現代のエスプリ・学校に行けない子どもたち」 昭和63年

・指導助言者

川崎市立南原小学校校長 白井 節夫 先生